

現代イランの大衆向けサイド論

—バーゲリヤーン・モヴァッヘド著『サイドの奇蹟』をめぐって—

Promoting *Sayyids* in Contemporary Iran: *Karāmāt-e sādāt* by Bāqeriyān Movahh̄hed

森本 一夫

Kazuo MORIMOTO

This study examines the representation of *sayyids* in *Karāmāt-e sādāt* (*The Miracles of Sayyids*) by Seyyed ‘Alī Bāqeriyān Movahh̄hed, a small and thin paperback book published in 2001–02 and intended for a popular readership. Bāqeriyān presents *sayyids* both as the recipients of the love and respect God enjoined all believers to express towards them and as surrogates of the Fourteen Infallibles who share with the Infallibles the status of God’s chosen ones and the true inheritors of scripture. The book is comprised mainly of miracle stories involving *sayyids*. Many of these stories emphasize the supernatural powers that *sayyids* latently possess by depicting miracles of the ‘*ulamā*’-cum-‘*urafā*’ (mystics) among them. This study sheds light not only on the place of *sayyids* in the dogmatic system of Twelver Shi‘ism but also the meaning of *sayyids* for the Islamic Republic, since *Karāmāt-e sādāt* also indicates how the belief that *sayyids* are the Infallibles’ surrogates can be combined with the idea that the ‘*ulamā*’ fulfill the same role.

はじめに

イランを訪れ、宗教書を扱う街なかの書店、大きめの参詣地内外の書店兼土産物屋、あるいは参詣地近くの歩道に本を並べる露天商などを冷やかしているところ、この国では実にさまざまな大衆向け宗教啓蒙書が出版されていることが分かる。そうした啓蒙書は、菊判より少し小さなログイー（roq‘ī）と呼ばれる判型でソフトカバー、写真や絵を使ったカラフルな表紙を持つことが多い。また150頁程度までと薄く、安価なのが一般的である。こうした啓蒙

* 本稿は JSPS 科研費 19H01317, 19H00564 による研究成果の一部である。

書が、現代イランで大衆向けに発信される宗教的な言説のあり方を知る有力な手がかりとなることは言うまでもない。本稿では、そうした啓蒙書のうちサイドを主題とする1冊、セイイエド・アリー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド (Seyyed 'Alī Bāqeriyān Movahhed) による『サイドの奇蹟』 (*Karāmāt-e sādāt*) を取り上げ、十二イマーム・シーア派 (以下、十二イマーム派) の大衆に向けて著されたこの本において、信徒集団のなかでのサイドの立場や役割がどのように描かれているのかを整理する。『サイドの奇蹟』は、イラン暦 1379 年／西暦 2000-01 年にイラン屈指の宗教都市ゴムで刊行されている。すなわちこの本は、十二イマーム派に属すアーリム (ウラマーの単数形) による大衆向けサイド論としてだけでなく、十二イマーム派を奉じる特殊な宗教国家体制であるイスラーム共和国体制のもとで著された大衆向けサイド論としても読むことができるであろう。

筆者の知る限り、十二イマーム派に関し、ウラマーなどの宗教的な権威がどのような形で信徒集団のなかでのサイドの立場と役割を描いてきたのかという問題が本格的に研究されたことはない¹。シーア派の一派であるからにはアリー一族であるサイドの特別な立場は顕著な形でその教義に組み込まれている (はずである) というのが一般的な理解かと思われるが、その仔細が明らかにされているとは言えない。『サイドの奇蹟』の検討は、この意味で有用たりうるはずである。

イスラーム共和国体制がサイド血統やサイドという社会範疇に決して無関心ではないことは、たとえば、現行の市民登録制度において、父方の祖父や父がサイドとして登録されている人物はやはりサイドとして登録されることが、確たる理由がない限り義務とされていることから理解される²。また、筆者が知る限り公式には何らの関連規定も声明も存在しないが、ホメイニー、ハーメネイーと2代の最高指導者が黒ターバンを被ったサイドで

¹ 当然そうした人々自身による議論は除く。また、Abdulaziz Sachedina, "Al-Khums: The Fifth in the Imāmī Shī'ī Legal System," *Journal of Near Eastern Studies* 39-4 (1980): 275-289; Norman Calder, "Khums in Imāmī Shī'ī Jurisprudence, from the Tenth to the Sixteenth Century A.D.," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 45 (1982): 39-47; Robert Gleave, "Marrying Fatimid Women: Legal Theory and Substantive Law in Shī'ī Jurisprudence," *Islamic Law and Society* 6-1 (1999): 38-68 のような、サイドと深く結びつく制度に関する研究は有用な知見を提供してきた。

² 市民登録法 (*Qānūn-e sabbt-e ahvāl*) 第 20 条補則 5。この補則はイスラーム共和国体制下で加えられたものである。

あったことを受け、次の最高指導者をめぐる体制内のネゴシエーションにあって、候補者が持つべき属性の一つとしてサイド血統が意味を持っているのではないかと囁かれることがある³。イスラーム共和国体制がサイドを有意な存在と見ているとするならば、それはどのような意味合いにおいてでありうるのか。『サイドの奇蹟』はイスラーム共和国の公式見解を記した書物ではないが、筆者は、そこで示されるサイド観はこのことを考えるのに有用であると考えている（理由は「おわりに」で述べる）。

仮に範囲をイスラーム共和国体制下で刊行されたサイド論に絞ったとしても、『サイドの奇蹟』には類書と呼ぶものが相当数存在する⁴。本稿は、そうした一群の書物のなかから、筆者が現時点においてもっとも良く読み解けたと考える『サイドの奇蹟』に焦点を絞り検討するものである。本稿は、十二イマーム派のサイド観を考えるという課題にとっても、イスラーム共和国体制にとってのサイドの意味を考えるという課題にとっても、あくまで最初の一步であることを断っておきたい。

以下、『サイドの奇蹟』からの引用に限り、略号 KS と頁番号だけで出典を示すこととする。また、（ ）にくるむ形での本文中での出典表示も行う。

I. 『サイドの奇蹟』の概要

『サイドの奇蹟』の概要を整理するところから始めよう。なお、この本では、「サイド」(Per. *seyyed*, pl. *sādāt*) という語が誰を指すのかが具体的に説明されることはない。おそらく著者は、サイドという存在は自分と読者の両方にとって身近で自明なものであると考えており、血統上の範囲といっ

³ たとえば、[Hasan] Yūsuf Eškevarī, “Bāz-towlīd-e seyyed-sālārī-ye šī‘ī dar qāmat-e valī-ye faqīh-e sevvom?” *Īrān-e emrūz*, June 19, 2021 (<https://www.iran-emrooz.net/index.php/politic2/more/91246/> 2022 年 11 月 6 日閲覧)。

⁴ たとえば Seyyed Rūh Allāh Nūrānī Lemrāskī, *Faḡā‘el al-sādāt: Taṣrīḥ-e maqām-e sādāt-e Banī al-Zahrā’*, Qom: Ebtēkār-e Dāneš, 2007–08; Seyyed Ne‘mat Allāh Hoseynī (Kahlā‘ī), *Naqš-e sādāt va emānzādegān-e bā karāmat dar Eslām*, Qom: ‘Aṣr-e Enqelāb, 2011–12 などがある。時代を問わず十二イマーム派のサイド論に範囲を広げるならば、Mīr Moḥammad-Aṣraf Hoseynī ‘Āmelfī, *Faḡā‘el al-sādāt: Bartarī-ye ḥānedān-e resālat va emāmat*, ed. by Seyyed Mahdī Rajā‘ī, 2 vols., Isfahan: Bahār-e Qolūb, 2014–15; ‘Abd al-Razzāq Kammūna al-Ḥusaynī al-Najāfī, *Faḡā‘il al-aṣrāf*, Najaf: Maṭba‘at al-Ādāb, 1970 といった作品も存在する。

た問題を細かく議論する必要を認めなかったのであろう。しかし、この本をファーティマに捧げる献辞のなかで彼女を「サイイドたちの母」と呼んでいることなどから (KS, 5), 著者の頭にあるのはハサンとフサインの男系子孫からなるファーティマ裔であることが了解される (ほかに KS, 16, 36-37 参照)。また彼は、「ムハンマド一族」(Āl-e Moḥammad), 「お家の人々」(Ahl al-Beyt), 「[ムハンマドの] 子孫」(zorriyye) といった言葉をかなり自由に「サイイド」と互換的に用いている。

1. 著者セイイェド・アリー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド

『サイイドの奇蹟』の著者は、自身もフサイン裔のサイイドであるアリー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド (1941-42 年生, 2011 年没; 以下, 略してバーゲリヤーンと呼ぶ) である⁵。彼はファリーマーン (現在の区分ではホラーサーネ・ラザヴィー州の都市) の出身で, マシュハド, ナジャフ, ゴムでアーリムとなるための研鑽を積んだ⁶。1966 年 4-5 月にあたるモハッラム月には, マルジャエ・タクリードの一人であったゴルパーイエガーニー (Moḥammad-Rezā Golpāyegānī; 1993 年没) の事務所からヤズド州のアバルグーに派遣されたことが分かる (KS, 117)。第 2 代イマームの殉教を記念するアーシューラーの時期に合わせた教化活動の一環であったと思われる。その後, イラン・イラク戦争の頃には 10 年近くファールス州のマルヴダシュト郡に居住し, 礼拝の導師を務めていた⁷。1989-90 年にゴムに戻ると, 今度はアーザル通り (ターレガーニー通り) 22 番小路のアル＝フサイン・モスクで礼拝の導師を務めた⁸。息子レザーの「今は亡き父は街区のモスク (masḡed-e maḥall) のルーハーニー [= アーリム] であり礼拝の導師

⁵ KS, 144 には系譜学者としても知られたマルジャエ・タクリード, マルアシー・ナジャフィー (Shēhāb al-Dīn Mar'asī Najafī; 1990 年没) の認証を得た著者の系譜が載せられている。

⁶ Nāser al-Dīn Anṣārī Qomī, *Aḥtārān-e faẓīlat*, vol. 4, Qom: Author, 2021-22, 121-122; Seyyed Reżā Bāqeriyān Movahh̄ed, “Zendeḡināme-ye ḥod-nevešt-e yek mo'alleḡ-e enṣā,” *Māhnāme-ye enṣā va nevisāndegī* 118 (2020): 49 [47-50] (本文献の入手にあたってはスーサン・アスィーリー氏にご助力いただいた。記して感謝する), およびレザー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド氏とのワッツアップ通話 (2022 年 11 月 21 日)。著者アリーの子であるレザー氏には最終的なワッツアップ通話以前にも数々のご教示をいただいた。記して感謝する。レザー氏との連絡を仲介して下さったアリー・タバータバーイー・ヤズディー氏にも謝意を表する。

⁷ Anṣārī Qomī, *Aḥtārān-e faẓīlat*, 121; KS, 122.

⁸ Anṣārī Qomī, *Aḥtārān-e faẓīlat*, 121; R. Bāqeriyān Movahh̄ed, “Zendeḡināme,” 49.

(pīšnamāz) であった」という言葉にあるように⁹、バーゲリヤーンは、民衆教化に携わる数多くのウラマーの一人であったとすることができる。

バーゲリヤーンは神秘主義（イルファーン, 'irfān）に強い関心を持っていた。レザーの回顧によれば、彼はルーミー（モウラヴィー）を大変尊敬しており、常々『マスナヴィー』冒頭部、通称「葦の書」(Ney nāme) を誦んじていた¹⁰。バーゲリヤーンはまたサイドの系譜にも専門性を持ち、ホラーサーンやアフガニスタンに関わるものを中心にサイド系譜に関する情報を収集し整理してただけでなく、サイドたちからの血統証明の依頼に応えてもいたという¹¹。

『サイドの奇蹟』以外のバーゲリヤーンの公刊著作としては、道徳 (aḥlāq) に関する 5 冊の書物が挙げられる。『《理性への贈り物》選：預言者たちとイマームたちの教育的で叙知を秘めたお言葉から』（原著はイブン・シュウバ・ハッラーニー [10 世紀] の作品）、『《命の泉》選：附碩学マジュリスイー（[ヒジュラ暦] 11 世紀）紹介』（原著はムハンマド・パーキル・マジュリスイー [1699 年あるいは 1700 年没] の作品）など、全てが十二イマーム派学者による著作のダイジェスト版である（原著がアラビア語の場合はペルシア語抄訳ということになる）¹²。ログイー版でソフトカバー、厚いものでも 144 頁と、大衆向けの啓蒙書であることが了解されるものである。ほかに、『サイドの奇蹟』の裏表紙には著者の別著作として『系譜の重要性』（*Ahammiyyat-e ansāb*）と『お家の人々に対する愛情』（*Dūstī-ye Ahl-e Beyt*）が

⁹ Ibid.

¹⁰ Ibid., 48–49.

¹¹ Anṣārī Qomī, *Aḥtārān-e faẓīlat*, 121 およびレザー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド氏とのワッツアップ通話（2022 年 11 月 21 日）。

¹² *Bargozīde-ye Toḥaf al-'oqūl: Golčīnī az soḥanān-e āmūzande va ḥekmat-āmīz-e payāmbārān va emāmān*, Qom: Ḥozūr, 2007 (original work in Arabic by Ibn Šu'ba al-Harrānī); *Bargozīde-ye Eyn al-ḥayāt: Be ẓamīme-ye šenāhtnāme-ye 'Allāme Maḡlesī*, Qom: Ḥozūr, 2018 (original work in Persian by Muḥammad-Bāqir Maḡlisī). ほかに, *Bargozīde-ye Ḥeṣāl: Golčīnī az soḥanān-e āmūzande va ḥekmat-āmīz-e payāmbār va emāmān*, Qom: Ḥozūr, 2008 (original work in Arabic by al-Šaykh al-Šadūq); *Bargozīde-ye šarḥ-e Fārsī-ye Mišbāḥ al-šarī'e va miftāḥ al-ḥaqīqe*, Qom: Ḥozūr, 2018 (original work in Persian by 'Abd al-Razzāq b. Muḥammad-Hāšim Gilānī); *Bargozīde-ye Eršād al-qolūb: Be ẓamīme-ye šenāhtnāme-ye 'Allāme Deylamī*, Qom: Ḥozūr, 2018 (original work in Arabic by Ḥasan b. Muḥammad al-Daylamī). これらは全て同一出版社刊行の「道徳分野の傑作〔古典〕テキスト」(šāhkār-hā-ye motūn-e aḥlāqī) シリーズを構成する。

挙げられているが、その刊行は筆者には確認できなかった¹³。

2. 『サイイドの奇蹟』の基本情報

『サイイドの奇蹟』は、ログイ版、ソフトカバー、144 頁の書物で、黒ターバンを被った（つまりサイイド血統を持つ）5 人のウラマーの写真を配した表紙を持つ（図 1）¹⁴。表紙の上縁右方には「サイイドたちの美質と奇蹟にまつわる逸話選」（*dāstān-hā-yī az faẓā'el va karāmāt-e sādāt*）という文言（後述の第 2 章の章題と一致）が、左端最上部には、こちらは 90 度左回転させた向きで「ファーティマ・ザフラーよ！」（*yā Fāṭima al-Zahrā'*）という文言が、それぞれ印刷されている。本に記された価格は 5,000 リヤルである。こ

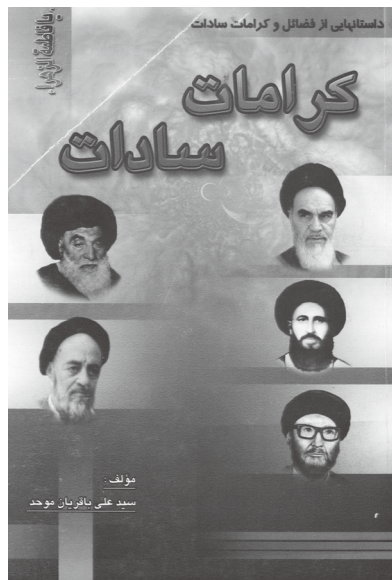


図 1 『サイイドの奇蹟』の表紙デザイン

¹³ Anṣārī Qomī, *Aḥṭarān-e faẓālat*, 121 では、ほかに『預言者としての務めに対する報酬』（*Mozd-e resālat*）と『聖クルアーン諸節の主題別選』（*Gozīde-ye mowẓūyī-ye āyāt-e Qor'ān-e karīm*）が未刊行の著作として言及されている。

¹⁴ 左下から時計回りにモハンマド＝ホセイン・タバータバーイー（Moḥammad-Ḥoseyn Ṭabāṭabā'ī; 1981 年没）、ホセイン・ボルージェルディー（Ḥoseyn Borūjerdī; 1961 年没）、ルーホッラー・ホメイニー（Rūḥ Allāh Ḥomeynī; 1989 年没）、おそらくハージー・ダフネイエ・バルハービー（Ḥājī Dahne-ye Balḥābī; 1965–66 年没；ご意見をいただいたアリー・ガンバリイ・ビードゴリー氏に感謝する）。最後の一人は不明。

の本が刊行された頃のリアルは実勢で 8,000 リヤル = 1 米ドルほどの価値だったことに照らすと¹⁵、安価な書物として出版されたと言って間違いはない。

版元はゴムのフェクラヴァラン (Fekr-āvarān) 出版である。フェクラヴァランは、この本が刊行されたのと同じイラン暦 1379 年にバーゲリヤーンの息子レザーによって設立された。実際はレザーが一人で運営していた版元であり、今から 10 年ほど前に多くの小規模出版社の出版免許が政策的に取り消されるまで、大衆向けの宗教啓蒙書を中心に刊行していた¹⁶。『サイドの奇蹟』は、すなわち、父の著書を息子が出版したものということになる。とはいえ発行部数は 5,000 部であり、決して知り合いに配るための自費出版というようなものではなかった。レザーによると、出版当時、奇蹟関係の大衆向け宗教書は人気があり、5,000 部は 1 年ほどで完売されたとのことである¹⁷。

バーゲリヤーンは「序」で執筆目的を二つ呈示する (KS, 8)。一つ目はサイドたち自身が「自らの家系の高貴さと偉大さ (šerāfat va ‘ezzat)」を理解して「自覚を深め」、イマームたちの道を歩むようにするためというものである。二つ目は「常に信徒たちの心のなかで堅い信仰と心からの確信のもととなってきたこれらの奇蹟 (karāmat-hā) が忘れられることがないように」とされる。サイドの美質や奇蹟を知らしめるという著者の意図に照らせば当然であるが、ここには、サイドたち自身の間にも、そのほかの信徒たちの間にも、サイドの特別な立場についてのしかるべき理解とそれに応じた振る舞いがいきわたっているわけではないという認識が現れている。

『サイドの奇蹟』は、「序」(KS, 7-8) と、それぞれ「第 1 章 クルアーンと伝承 (revāyāt) のなかのサイド」(KS, 9-28), 「第 2 章 サイドの美質と奇蹟にまつわるお話」(KS, 29-136) と題された二つの章からなる。第 1 章では、クルアーンの章句と預言者ムハンマドおよびイマームたちに帰され

¹⁵ Anonym., “Dolār dar 30 sāl-e gozashte čand būde ast?/jadval,” *Donya-ye eqtesād*, Farvardin 20, 1397 AHS (<https://donya-e-eqtesad.com/بخش-سیاست-خوان-33-73884/62-دلار-در-سال-گذشته-چند-بوده-است-جدول>) 2022 年 10 月 16 日閲覧。

¹⁶ レザー・バーゲリヤーン・モヴァッヘド氏とのワッツアップ通話 (2022 年 11 月 21 日)。イラン・本と文学の家 (Hāne-ye Ketāb va Adabiyyāt-e Īrān) のウェブサイトでは、フェクラヴァラン刊行の書目として 83 タイトルを確認できる (<https://ketab.ir/search?search=فکرآوران>) 2022 年 9 月 30 日閲覧。

¹⁷ ワッツアップ通話 (2022 年 11 月 21 日)。

るハディースなどに依拠しながら、サイイドの地位や役割が示される。それに続く第2章には、サイイドにまつわる105の奇蹟譚が集められている。

3. 『サイイドの奇蹟』の情報源

バーゲリヤーンは、書物から引用を行う際には脚注を用いて出典表示を行う。ただし、引用文献は往々にして題名の短縮形で示されるのみである。

第1章での文献注はほとんどがクルアーンの章節番号やハディースの出典を示すものである。後者としては『光の大海』(*Muḥammad-Bāqir al-Maḡlisī, *Biḥār al-anwār*; 注で5回典拠として言及)や『理性への贈り物』(*Ibn Šu‘ba al-Ḥarrānī, *Tuḥfat al-‘uqūl*; 2回)といった十二イマーム派の文献だけでなく、『散りばめられた真珠』(al-Suyūfī [1505年没], *al-Durr al-manṭūr*; 2回)やファフルッディーン・ラーズイー (Faḥr al-Dīn al-Rāzī) のクルアーン注釈 (*Tafsīr*; 2回) といったスンナ派文献も言及される (*付きの著者名情報は筆者の補足)¹⁸。第1章には「スンナ派のウラマーの言のなかでのムハンマド一族への愛情」という節も含まれている (KS, 23–24)。スンナ派文献の利用は、サイイドの特別性の根拠として引かれるハディースが同派にも認められていることを示すために行われているものであろう¹⁹。

第2章の奇蹟譚のうち87は書物から取られている。計34タイトルの引用元のうち三つ以上の奇蹟譚の取材源となった書物は以下の八つである：『サイイドの美質』(Mīr Muḥammad-Ašraf [1709–10ないし1732–33年没], *Faẓā’il al-sādāt*; 24話), 『ウラマーの奇蹟』(‘Abd al-Raḥmān Bāqer-zāde Bābolī [1970–71年生], *Karāmāt-e ‘olamā’*; 8話), 『預言者たちの相続人たち』(*Ġolāmḥoseyn Raḥīmī Eṣfahānī [1935–36年生, 2005–06年没], *Vāreṣān-e anbiyā’*; 4話), 『ラームサルの偉人たち』(Moḥammad Samāmī Ḥā’erī [1944–45年生], *Bozorgān-e Rāmsar*; 4話), 『リダーさまのおかげになる利得』(‘Abbās Qomī [1877年生, 1941年没], *Favā’ed al-Raḏaviyye*; 3話), 『神秘

¹⁸ ほかに引かれる十二イマーム派文献は, *Kaṣf al-ḡumma* (*al-Irbilī [1293または94年没]); *Ma‘ānī al-aḥbār* (*al-Šayḥ al-Šadūq); *Tafsīr al-šāfi‘* (*al-Fayḍ al-Kāšānī [1680年没]); *Uṣūl al-Kāfi* (*al-Kulaynī [939–40または40–41年没])。ほかに引かれるスンナ派文献は, *al-Sawāhid al-tanzīl* (*al-Ḥaskānī [11世紀]); *Mustadrak al-Šaḥīḥayn* (*al-Ḥākim al-Naysābūrī [1014年没])。以上は全て1回の引用。ほかに“*Safīne*”からの引用が1回。

¹⁹ ただし「スンナ派のウラマーの言のなかでのムハンマド一族への愛情」節で引用される文献はラーズイーのクルアーン注釈のみである。

家たちの模範』(**Šādeq Ḥasan-zāde* [1963–64 年生] and *Maḥmūd Ṭayyār Marāgī* [1965–66 年生], *Osve-ye ‘ārefān*; 3 話), 『エマーム・ホメイニーの生涯にまつわる特別なお話』(**“ġam’-ī az fožalā, ”Sargozašt-hā-ye vīže az zendegānī-ye Emām Ḥomeynī*; 3 話), 『歴史選』(*Moḥammad-Hāšem Ḥorāsānī* [1863–64 年生, 1934–35 年没], *Montaḥab al-tavārīḥ*; 3 話)。ここからは、バーゲリヤーンが、17 世紀末に書かれたサイド論であるミール・ムハンマド＝アシュラフ著『サイドの美質』を大いに利用するものの、それ以外については、特に古典にこだわることなく、主として十二イマーム派ウラマーの伝記に取材して奇蹟譚を収集していることが了解される²⁰。引用話数 2 以下の文献を考慮に入れるならば、話数で抜きん出る『サイドの美質』の比率が下がる分、ウラマーの伝記への依拠というこの傾向はより顕著に確認できることになる²¹。

情報源が不明な一つを除いた残り 17 の奇蹟譚は、ほかのウラマーや神学生、村人などから口伝で聞いたものとされる。そのうち 8 話はアフガニスタン中北部のバルハーブ (Balḥāb) 郡での奇蹟を伝えるものである (9 [KS, 39–40], 88–89 [KS, 118–120], 93 [KS, 123], 101–104 [KS, 129–135]; イタリアで示したのはテキスト中で振られている奇蹟譚の番号)。それらと四つの奇蹟譚を一族の成員から聞いたキャシュクサラー (東アゼルバイジャン

²⁰ 『サイドの美質』以外の 7 タイトルについてイラン国立図書館の OPAC を検索し主題欄を見ると、「ウラマー伝」と見なしうることが確認できないのは『ラームサルの人々たち』(ラームサル市に関わる伝記集)と『歴史選』(14 人の無謬者の伝記集)の二つのみである。このうち前者から引かれる奇蹟譚は全てがウラマーであるサイドを主人公にしていること、あるいはウラマー伝から引用されていることが分かる。

²¹ 引用数 2 の文献: *‘Allāme Ṭabāṭabā’ī mīzān-e ma’refāt* (Aḥmad Loqmānī [1963–64 年生]); *Bardāšt-hā-ī az sīre-ye Emām Ḥomeynī*; **Dār al-salām* (Mīrzā Ḥusayn Nūrī [1902 年没]); **Montahā al-āmāl*; *Šahāb-e šar’at*. 引用数 1 の文献: *‘Āye-ye omīd Seyyed Moḥammad-Bāqer Šafī*; **Bo’-d-e ‘āḥārom yā eḥsās-e ‘erfānī* (Hemmat Sohrāb-pūr [1963–64 年生]); *Dar kū-ye bī nešān-hā*; *Dāstān-hā-ī az zendegī-ye ‘olamā’* (Moḥammad-Taqī Šarfi); **Dāstān-hā-ye šegheft*; *Mardān-e ‘elm dar meydān-e ‘amal* (Seyyed Ne’mat Allāh Hoseynī); *Daryā-ye bī šāhel Seyyed Baḥr al-‘Olām*; **Meh-r-e tābān*; *Mohājjer elā Allāh: Seyr-ī dar zendegī-nāme-ye Āyat Allāh al-‘Oẓmā Lārī* (‘Alī Karīmī Jahromī [1941–42 年生]); **Moqaddame-ye mabāheṣ al-oṣūl*; *Olgū-ye ze ‘āmat*; *Pā be pā-ye āftāb*; *Qīṣaṣ al-‘ulamā’* (Mīrzā Muḥammad Tunikābunī [1885 年没]); *Šāh-ābādī-ye bozorg*; *Šahīd-e Avval faqīh-e Sarbedārān* (Moḥammad-Hoseyn Amānī [1993–94 年当該書刊行]); *Šahīfe-ye del*; *Šaraf al-Dīn [Āmolī] Čāvūs-e Vahdat*; *Seyyed Mortazā*; *Sīmā-ye farzānegān* (Rezā Moḥtārī [1963–64 年生]); **Towḥīd-e ‘elmī va ‘eynī* (‘Allāme Tehrānī [1926–27 年生, 1995–96 年没]); **Yanābī’ al-mawadda*. *つきのものはウラマーの伝記とは言えない。**つきのものは同一タイトルの作品が複数あり特定できない。なお、当注の文献については著者情報補足を行っていない。

州の都市)のマレキー家の人々にまつわるもの(97-100 [KS, 125-129])を除けば、情報源一つあたりの収録話数は一つのみである(KS, 122ff. など参照)。

II. 『サイイドの奇蹟』が示すサイイド観 —ムスリム共同体での役割をめぐる—

では、『サイイドの奇蹟』はサイイドをどのように語っているのでしょうか。この節では、主として第一章に取材しながら、サイイドの立場がどのようなものとして示されているのかを見てみよう。彼らの奇蹟として描かれる内容、そしてそれがこの節で述べるサイイド観とどのように結びつくかについては、次節で別途まとめることとする。

1. ムスリム共同体のなかでのサイイドの立場と役割 —二つのアプローチ—

バーゲリヤーンがサイイドの何たるかについて、また彼らのムスリム共同体での立場と役割についてどのような考えを持っているかは、第1章の最初の部分から読み取ることができる。最初の節で「愛情 (maḥabbat va dūstī) は生きること (zendegī) の礎である」ことを説いたバーゲリヤーンは、続く三つの節で、サイイド(テキスト中この部分では「ムハンマド一族」)の特性に関し以下の三つのことを述べる：

- (1) クルアーンの命令により、ムハンマド一族への愛情 (dūstī) は義務である。
- (2) ムハンマド一族は神に選ばれた者たち (bargozīdegān) であり、神の財産を受け継ぐ者たち (vāreṣān-e ḥodāvand) である。
- (3) ムハンマド一族はこの上なく清らかな一族 (pāktarīn ḥānedān) である。²²

²² KS, 12-16. 1 番目と 3 番目の文言は、それぞれ第 1 章の 2 番目と 4 番目の節の見出しから取った。2 番目の文言は、3 番目の節の最初の文の一部である(見出しは「ムハンマド一族は神に選ばれた者たちである」で切れる)。

このうち、ムハンマド一族の清らかさは彼らとそれ以外の人々との間の本性的な違いそれ自体を説明するものなので、ムスリム共同体成員間のあるべき相互関係のなかでのサイドの立場と役割にただちに關係するのは最初の二つであると言える。

サイドへの愛情を義務とするにあたりバーゲリヤーンが引く最大の根拠は、「愛情の節」(Āye-ye taḥīr) として知られるクルアーン 42 章 23 節である。この文言を、「言え、『私は預言者としての務めに対し私の近親者たちを愛すること以外の報酬をあなたたちに求めはしない』」と訳すバーゲリヤーンは、シーア派とスンナ派の全てのクルアーン注釈者が、この句がサイドたち(「神の使徒の家系」[ḥāndān-e Rasūl-e Ḥodā] と「お家の人々」)に関わるものであるとの見解で一致しているとする²³。また彼は、預言者の発言においても、「彼のお家の人々」に対する愛情が、神への愛情、預言者自身への愛情、永遠の幸福、神の満足と必要充分な關係にあるとされていると述べる(KS, 12-13)。

バーゲリヤーンが、サイド(「ムハンマド一族」)を「神に選ばれた者たち」「神の財産を受け継ぐ者たち」とする根拠として引用するのはクルアーン 35 章 32 節、「その後、我らは僕たちのなかから選んだ者たちに、この啓典を継がせた。だが彼らのうちのある者たちは自分自身に不義をなし、ある者たちは中間の道をとる。また彼らのなかには、アッラーのお許しのもとに、率先してさまざまな善行をなす者たちもいる。それは偉大なお恵みである」である²⁴。バーゲリヤーンは、「僕たちのなかから選んだ者たち」をムハンマド一族ととる解釈に従っていることになる。そして第 1 章で引用される、第 8 代イマームがカリフ、マアムーンと彼を取り巻くウラマーたちを論破する逸話からは、「僕たちのなかから選んだ者たち」をムスリム全体ではなくムハンマド一族ととるこの解釈が、スンナ派との対置が意識されるなかで、十二イマーム派の立場を明確に示す重要なものと理解されていることが

²³ KS, 13. スンナ派に関してはこれが事実の全てではないことは、たとえばバーゲリヤーンが同じ章の別箇所でもさにその箇所を引用する (KS, 16, 18) スューティー『散りばめられた真珠』中の同節の注釈を参照すれば明らかである (al-Suyūṭī, *al-Durr al-manṭūr fī al-tafsīr bi-l-ma'ṭūr*, 'Abd Allāh b. 'Abd al-Muḥsin al-Turkī [ed.], 17 vols., Cairo: Markaz li-l-Buḥūṭ wa-l-Dirāsāt al-'Arabiyya wa-l-Islāmiyya al-Duktūr 'Abd al-Sanad Ḥasan Yamāma, 2003, 13: 144-155)。

²⁴ 訳は澤田達一(訳)『聖クルアーン：日本語訳』[ゴム]：啓示翻訳文化研究所, 2013, 438 を一部改変。

分かる (KS, 21-22)。

ここで、「僕たちのなかから選んだ者たち」が「中間の道をとる」者たちや「自分自身に不義をな」す者たちを含むことは重要である。そこから、啓典を受け継ぐ者に当たるのは無謬のイマームたちだけでなく、ムハンマド一族に属すより広い範囲の人々であることが導き出されるからである。ムハンマド一族のうちそれぞれ誰が、「自分自身に不義をな」す者、「中間の道をとる」者、「率先してさまざまな善行をなす者」に当たるのかに関しては、それぞれ第5代イマームと第6代イマームに帰される二通りの説明が引用される (KS, 18-19)。第5代イマームの言では、これら三つの範疇に相当するのは、それぞれ、善行と悪行を等しく行う者、常に神の僕として生きる者、そして、人々を神の道に誘い、勧善禁悪を行い、虐げられた者の味方で裏切り者の敵である者である。これに対し第6代イマームの言は、この啓示の対象にはファーティマ裔でも剣を振るって決起し人々を迷妄に誘う者（すなわちザイド派のイマームなど）はそもそも含まれないとした上で、人々を迷妄に誘いもしなければ正しい道に導きもしない者、イマームを正しく識る者 (emām-šenās), そしてイマーム自身の三つが、三範疇にそれぞれ該当するとする。この二つの言をどのように総合して理解すべきかについてバーゲリヤーンは無言であるが、イマームらの言は、表現は違っても究極的には同一の真実を語っていると解釈されることになるであろう。つまり、ここで示唆されているのは、「率先してさまざまな善行をなす者」とはイマームを、「中間の道をとる」者とは揺るぎない信仰を持つ十二イマーム派信徒を指すという考えであると見てよいと思われる。その場合、「自分自身に不義をな」す者とは、十二イマーム派のイマームに明確に従うわけでもなく、かといってそれ以外の派のイマームとなったり、そうしたイマームに明確に従うのでもないような者たちを指すということになるであろうか²⁵。

2. イマームの代理としてのサイイド

サイイドたちは「神に選ばれた者たち」であり「神の財産を受け継ぐ者たち」であるというバーゲリヤーンの言明は、より具体的には何を意味するの

²⁵ この問題をめぐる 10 世紀の十二イマーム派有力アーリム、シャイフ・サドゥーク (991 年没) の議論については本特集所収の吉田論文を参照せよ。

であろうか。「序」からはこのことに関するバーゲリヤーンの考えがはっきりと読み取れる (KS, 7-8) :

イスラーム史、シーア派の普及、正しいイスラームの見解と思潮の拡散においてサイドが果たした役割は大変顕著である。この偉大なる一族は何世紀にもわたり数多くの災難や困難を甘受しながらアリーの宗旨 (ā'in) を守るという重荷を背負い続けてきた。神の使徒—神よ彼と彼の一族に祝福と平安を与えたまえ—の一族がイスラーム世界の最遠の知まで移住したことは、確かに移住者たちには多くの困難を強いたが、それがシーア派の発展に及ぼした影響は否定できない。預言者—神よ彼と彼の一族に祝福と平安を与えたまえ—の一族に属す一人のサイドがある地域にいたると、人々はあたかも彼が蠟燭であるかのようにその周りに集まり、経済の上でも信仰の上でも政治の上でも彼に助けを求めるようになった。彼らは、イスラーム世界の大変多くの場で活動し続けてきた、清浄なるイマームたちの代理 (namāyandegān-e a'emme-ye aṭhār) であると言えるであろう。

さまざまな社会におけるこの指導者としての役割は、世代をこえて彼らのものであり続けており、彼らもまた、考えられるかぎり最良の形で、それぞれの力に応じて人々にとっての避難所となってきたのである。

この偉大なる一族からは、一街区、一都市、はては一国の歴史の流れに目立った影響を与えた優れた人物が輩出された。その顕著な例としてエマーム・ホメイニーを挙げることができる。彼は至高なる神にすぎり、彼の清浄なる父祖に助けを求めつつ、世界を揺るがし、東と西の両超大国を打ち倒し、多くの偉大な人々が不可能だと考えていたイスラーム政府を打ち立てた。

長い年月にわたって、サイドである数え切れないほどの人々が清浄なる彼らの父祖の道を継ぐ者となり、高い境地に達した。そして人々は常にそのような人々 [が帯びた神由来] の恩寵 (barakāt) から益を得てきた。

サイドたちは「清浄なるイマームたちの代理」であり、十二イマーム派

とその「正しいイスラーム的見解と思潮」を担い、自らの拡散を通じてそれを広めてきたとされている。また彼らは「世代をこえて」定着先の各地のムスリム社会で中核的な役割を担い続けているとされ、その代表としてホメイニーが言及される。クルアーン 35 章 32 節にもとづいてサイイド一般を「神に選ばれた者たち」であり「神の財産を受け継ぐ者たち」であるとする解釈は、歴史を通じて示されてきたとされるこのようなサイイドの立場と役割を神の摂理によるものと呈示していることになる²⁶。

バーゲリヤーンが、サイイド以外の者には、サイイドのようにクルアーンやイスラーム教に関する正しい知を獲得し、受け継ぐことはできないと考えていることも分かる。「他の者たちには苦勞せねば手にすることができないような知識」でさえもサイイドたちには「神の恩寵によって加えられて [=与えられて] いる」と述べるバーゲリヤーンは、さらに、「あらゆる面から完璧な知者がいるにもかかわらず、この啓典がどこの馬の骨とも知れない無知な者や、別の、知識人とされる [亜流の] 者に与えられたなどということが想像できるであろうか」とも述べるのである (KS, 14)。

このように、バーゲリヤーンは、サイイドをイマームの代理として描き出している。イマームが同時には一人しか存在せず、かつ 10 世紀以降は完全なお隠れの状態にあることを考えるならば、これは、「ムハンマド一族」としての血統により、イマームたちとともに神が「僕たちのなかから選んだ者たち」を構成する彼らが、イマーム不在の場においてはイマームの代理となる、イマームに連続する存在として描かれていることを意味しよう。無謬性は持たないもののイマームとともに神が「選んだ者たち」を構成するサイイドは、それ以外のシーア派信徒から見ればイマームに準じる存在であることになる²⁷。バーゲリヤーンは第 1 章で、「神は預言者とアリーを 1 本の木の根と枝として創造した。ファーティマはその木が実をつける原因 (ba'es) であり、ハサンとフサインは果実、シーア派信徒は葉である」という、預言者に

²⁶ バーゲリヤーンは、歴史を通じて示されてきたということそのこと自体にも、サイイドの特別性の証拠として言及する (KS, 24, 25)。

²⁷ バーゲリヤーンは「人々は神の使徒 [祈願文省略] の子供たちを識らなければならない。そのことによって神の使徒 [祈願文省略] とイマームたちの記憶と名を常に眼前にしていられるように。また、サイイドたちへの敬意を通じて自らのイマームたちに敬意を払うために」と述べる (KS, 25; 第 1 章中「お家の人々への愛情の秘密は何か」という節の一部)。

帰される言を引用している (KS, 16)。このハディースは、血縁関係があるわけではない一般の信徒たちをも葉という形で預言者一族の木の一部とすることにより宗派としての十二イマーム派のあるべき一体性を示していると言えるが、この構図のなかでのサイイドの位置づけは、やはり、ハサンとフサイン、そして歴代のイマームたちとともに果実であるということになるであろう。

『サイイドの奇蹟』には、無謬者たちとサイイドたちとの間の連続性という観念が、バーゲリヤーンにとってはすでに内面化され、当たり前のものとなっていることを示す論法も見られる。事前の夢のなかで預言者が自分にしてくれたのと同じことを第8代イマームにしてもらったある人物が、実はイマームが問題の夢の内容それ自体を知っていることを理解し、そのことによって「サイイドたちを助けるという自分の決意をさらに固めた」と述べたという奇蹟譚はその一例と言えよう (KS, 38-39)。ここで常ならぬ力を見せたのは無謬者の一人であり、単なるサイイドではない。それなのに唐突にサイイドへの援助が話題に上るのは、まさに両者の間の連続性の観念に支えられてのことなのである。

III. 奇蹟譚が伝えること —三つの主要なメッセージ—

『サイイドの奇蹟』第2章に集められている奇蹟譚の内容、そしてそれが前節で見たサイイド観とどう関係するかという問題の検討に移ろう。バーゲリヤーンは、彼が個々の奇蹟譚から引き出しようと考えているメッセージを改めて自分の言葉で説くわけではない。また、奇蹟譚の配列はおおむね出典ごととなっており、メッセージにもとづいているようには見受けられない²⁸。しかし、簡単な言葉で呈示される、多くは1頁内外の奇蹟譚の内容は一般に単純であり、それがサイイドについて何を伝えようとしているかを把握することは大体において難しくは感じられない。筆者は、105の奇蹟譚を全体として見るとき、そこからは以下の三つの主要なメッセージを読み取る

²⁸ ただし、引用される奇蹟譚の内容には出典ごとに傾向性が見られるので、結果として似たメッセージの奇蹟譚が集まっているということはある。

ことができると考える：

- (a) サイドを愛し彼らに敬意を払う者、サイドを助ける者、助けようとする者は良い報いを受ける。逆に敬意を欠く行いをする者や害を及ぼす者は罰を受ける。
- (b) サイドは、血族である無謬者たちと特別な繋がりを持ち、彼らに保護を与えられている。また彼らは、血縁関係のゆえに無謬者たちから導きを与えられる潜在性を持つ。
- (c) サイドは、その血統により、自らの意思により奇蹟を惹起しえたり、彼を助けるような奇蹟が不作為のうちに与えられたりするような高い霊的境地に達する潜在性を持つ。

筆者の解釈と整理では、計 105 の奇蹟譚のうち、28 から (a) を、35 から (b) を、54 から (c) を読み取ることができる²⁹。以下、それぞれのメッセー

²⁹ 合計が 105 を超えるのは複数のメッセージを伝える奇蹟譚があるからである。以下、それぞれのメッセージを伝える奇蹟譚を示す（ミール・ムハンマド＝アシュラフ著『サイドの美質』から引用されているものには後の議論のため*を付す）。(a) のみを伝えるもの：*1 (KS, 31-32), *2 (KS, 32-33), *4 (KS, 35), 10 (KS, 40), *33 (KS, 59), *40 (KS, 68-70), *42 (KS, 71-73), *45 (KS, 75-76), 47 (KS, 77), 76 (KS, 107-108)；(b) のみを伝えるもの：14 (KS, 43-44), 18 (KS, 46-47), 20 (KS, 48), 72 (KS, 104), 75 (KS, 106-107), 81 (KS, 111-112), 82 (KS, 112-113), 103 (KS, 133-134), 105 (KS, 135-136)；(c) のみを伝えるもの：9 (KS, 39-40), 12 (KS, 41-42), 13 (KS, 42-43), 16 (KS, 45), 17 (KS, 46), 19 (KS, 47-48), 21 (KS, 49), 24 (KS, 51), 25 (KS, 51-52), 26 (KS, 52-53), 46 (KS, 76), 48 (KS, 77-78), 49 (KS, 78-80), 50 (KS, 80-81), 51 (KS, 81), 52 (KS, 82), 53 (KS, 82-83), 54 (KS, 83-84), 55 (KS, 85), 56 (KS, 85-86), 57 (KS, 87-88), 58 (KS, 89), 59 (KS, 90-91), 60 (KS, 91-92), 62 (KS, 94), 63 (KS, 95), 64 (KS, 96-97), 65 (KS, 97-98), 67 (KS, 99-100), 78 (KS, 109-110), 79 (KS, 110-111), 80 (KS, 111), 83 (KS, 113-114), 84 (KS, 114), 85 (KS, 114-116), 86 (KS, 116-117), 87 (KS, 117-118), 88 (KS, 118-119), 90 (KS, 120-121), 91 (KS, 122), 92 (KS, 122-123), 94 (KS, 123-124), 95 (KS, 124), 96 (KS, 125), 98 (KS, 126-127), 99 (KS, 127-128), 101 (KS, 129-130), 104 (KS, 134-135)；(a) と (b) を伝えるもの：*3 (KS, 33-34), *6 (KS, 36-37), *8 (KS, 38-39), 29 (KS, 55-56), *30 (KS, 56-57), *31 (KS, 57), *32 (KS, 57-59), *34 (KS, 60), *35 (KS, 61-62), *36 (KS, 62-64), *37 (KS, 64), *38 (KS, 65), *39 (KS, 65-68), *41 (KS, 70-71), *43 (KS, 73-74), *44 (KS, 74-75)；(a) と (c) を伝えるもの：97 (KS, 125-126), 100 (KS, 128-129)；(b) と (c) を伝えるもの：22 (KS, 49-50), 23 (KS, 50), 28 (KS, 55), 61 (KS, 92-94), 66 (KS, 98-99), 77 (KS, 108-109), 102 (KS, 131-132)。ほかに、特定のサイドの人格の素晴らしさや高い学識を伝えるもの（奇蹟含まず）が 7 話（11 [KS, 41], 15 [KS, 44-45], 68 [KS, 100-101], 70 [KS, 102-103], 71 [KS, 103-104], 73 [KS, 105], 74 [KS, 105-106]），第 4 代イマームやアリーの息子アッバースの生前・死後の奇蹟を伝えるものが 3 話（*5 [KS, 35-

ジを伝えたと筆者が考える奇蹟譚を例示した上で、メッセージが持つ意味合いを考えてみよう。

たとえば次の奇蹟譚は、(a) を主としながら (b) のうち無謬者による保護の存在をも伝えるものである (34 [KS, 60]) :

イマーム・ハサンさま—彼に平安あれ—がおっしゃった。ある日のこと、家族が貧窮のなかで暮らしていたある男が糧を得ようと外出した。1日の終わりに、その日稼いだ1枚の銀貨でパンを買って家に向かった。帰り道に、稼ごと糧を得る術もなく腹を空かせたサイドの女と男に出くわした。その善き男は「神の使徒—神よ彼と彼の一族に祝福と平安を与えたまえ—の子であるこの人たちは、私や私の子たちよりもこの食べ物にふさわしい」と考えた。それゆえ、持っていた食べ物を全て彼らに渡して手ぶらで家に向かった。道中、妻と子供たちにどう言おうと考え込んだ。その時、一人の男が人々に彼のことを尋ね回り、彼のことを知らないかと質問して回っているのに気づいた。男はその男のところへ行って自分こそが探している相手だと告げ、「用事は何ですか」と訊いた。男は「この手紙とこのアシュラフィー金貨500枚はあなたのものです。あなたの父方のいとこがエジプトで暮らしていたのですが、少し前に亡くなりました。この遺産があなたに遺されたのです」と言った。男は大喜びして家に向かい、ことの次第を家人に伝えた。男はまた、その晩に神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与えたまえ—とアリーさま—彼に平安あれ—を夢で見た。

自らを犠牲にしてもサイドを助けなければならないというメッセージ ([a]) は、サイドへの愛情は義務であるとする、前節で示したサイドに対する二つのアプローチの一つ目に対応する。また、この奇蹟譚は予期せぬ遺産の到着がムハンマドとアリーの介在によって起こった奇蹟であることを示唆し、無謬者による保護の存在というメッセージ ([b]) も伝えているが、

36], 89 [KS, 120], 93 [KS, 123]), ザムザムの泉がハーシム裔に属することを述べるもの (サイドの奇蹟含まず) が一話 (*7 [KS, 37-38]), サイド血統を持つウラマーが十二イマーム派に改宗し周囲の人々に影響を与えた話 (奇蹟含まず) が一話 (69 [KS, 101-102])。

そこでは、(啓典を受け継ぐ者たちという積極的な意味においては、) 預言者・イマームとの連続性という、前節での二つ目のアプローチから導かれるサイド像が喚起されてもいる。サイドに対し善行を行わねばならないのはそれが神の定めた義務だからだけではなく、そのことが彼らと血統的に繋がる預言者やイマームたちを喜ばせることにもなるからなのである。

(b) のうち無謬者による導きの存在をメッセージとして伝える奇蹟譚の例としては、後にマルジャエ・タクリードとなったマルアシー・ナジャフィーを主人公とする以下のものが挙げられる (75 [KS, 106–107]):

アーヤトッラー、セイイエド、シェハーボッディーン・マルアシー・ナジャフィーは、その「深い」霊性 (ma'naviyyat) と「徹底した」服従 ('obūdiyyat) により何度も時のイマームさま「お隠れ中の第 12 代イマーム」―彼に平安あれ―に謁見なさったが、その一例を簡潔に記す。「彼の方は」おっしゃった。ある時私はサーマッラーにいた。夜、願い事があったので時のイマーム―至高なる神よ、彼の高貴なる喜び [= 再臨] を早めたまえ―のお隠れの場所である地下室に行った。扉は内側から閉めていた。突然足音が聞こえた。最初は怖かったが、先方が朗らかに挨拶なさったので落ち着き、どなたであるかを尋ねた。すると「汝の父方の親族 (banī a' mān) の一人である」とおっしゃった。「ご出身は」という問いには「ヒジャーズ出身」とお答えになる。また、私が「扉は閉まっていたはずですが、どうやってお入りになりましたか」と問うと、「神はあらゆることをなしえたまう」(クルアーン 2 章 20 節ほか) とおっしゃる。

どうして夜のこんな時間にここに来たのかとお尋ねになった。「お願い事があるのです」と言う、「それらは一つを除いて全てかなえられた」とおっしゃった。それから色々と指針を与えて下さった。なかでも集団礼拝、勉強「あるいは読書」、法学、ハディースとクルアーン注釈、親族を大事にすること、師匠たちの権利を守ること、『雄弁の道』と『サッジャードさまの紙葉』の祈祷文を暗記することを強調なさった³⁰。

³⁰『雄弁の道』は初代イマーム、アリーの言葉を集めたとされる書物、『サッジャードさまの紙葉』は第 4 代イマームに帰される祈祷集である。

「私のために神に祈って下さい」と申し上げた。すると両手を上げられ、「神よ、預言者の権利によって、このサイドが聖法への奉仕において成功を収めるようお計らい下さい。神ご自身との会話の甘さを味わわせてやって下さい」と申し上げなされた。そしてイマーム・フサイン―彼に平安あれ―の土〔カルバラーの土〕を少し下さった。私はまだそれをなにがしか持っている。瑪瑙の入った指輪も下さった。それも私はまだ持っており、色々な効験を見た。しかし、そのお方は突然姿を消してしまわれた。

無謬者がサイドに導きを与えるという内容のこのような奇蹟譚は、無謬者たちとの間の連続性という、前節での二つ目のアプローチによるサイド観を呈示するものと言えよう。集団内部での導き・導かれる関係の存在によって、「神に選ばれた者たち」としてのムハンマド一族の一体性が強調されているのである。

(c) のメッセージを伝える奇蹟譚の例としては、ホメイニーの奇蹟を伝える次のものがある (86 [KS, 116-117]) :

ホッジャトルエスラムヴァルモスレミーン、ラヒーミヤーン師³¹が伝えて言った。ある日、赤新月社に勤める信仰篤い人物であるハリーリーが落ち着かぬ様子で電話をかけてきて、アクバリーさんという大変良い兄弟 [=同志] が前線で負傷した、弾丸の破片が脳にいたり、大変危険な状態だと言った。医師たちは彼について否定的な見解で、回復について絶望している。唯一の望みは神、そしてエマーム [=ホメイニー] の祈願だとのことである。このような次第で、私にしつこく求めるには、エマームのところに角砂糖をいくつか持っていき、エマームの手でそれにバラカを宿らせ (bā dast-e emām tabarrok)、それに向かって何か祈祷を詠んでいただき、負傷者の回復のために祈願をしていただいてほしいとのことであった。私は角砂糖をいくつかエマームの御前に持って行

³¹ ホメイニーの事務所に勤めていたことで知られる Moḥammad-Hasan Raḥīmīyān. Anonym., “Zendegīnāme-ye Hoḡḡat al-Eslām Raḥīmīyān towliyat-e ḡadīd-e Masḡed-e Moqaddas-e Ḡamkarān” (<https://rasekhoon.net/news/show/754539/> زندگینامه حجت الاسلام رحیمیان تولیت جدید مسجد مقدس جمکران (2022 年 11 月 14 日閲覧)).

き、ことの次第を申し上げた。かのお方は角砂糖にバラカを宿らせ、それに向かって祈祷を詠み、彼の健康のために祈願なされた。私が事務所に戻るとハリーリーさんが事務所にやって来ており、角砂糖を受け取り、急いで戻っていった。

何日か後、ハリーリーさんは電話をかけてきて、狂喜して泣きながら礼を言い、友人が危険を脱し、医師たちは彼の回復に呆然としていると吉報を伝えた。何ヶ月か経ってまた電話をかけてきて、改めて礼を言うとともに、治癒 (šafā) を得た負傷兵のために、エマームに謁見しその御手に接吻するための招待状が欲しいと依頼してきた。その結果、くだんの負傷兵は喜び勇んで謁見の榮に浴した。

くだんの人物は私に以下のように語った。私の治療に関わっていた有名な専門医で、私が回復することは無理と断言していた某医師が、この出来事の後ではっきりと私に言いました。「私たち医師は奇蹟 (mo'geze) を信じません。しかし、あのような状況にあった後、突然全てがひっくり返り、何日か後には自分の脚で歩くようになったあなたのような人を見ると、奇蹟を信じないわけにはいきません」と。

この話におけるサイド—具体的に言えばホメイニー—は、無謬者たちに準じる者、無謬者たちとともに神が「僕たちのなかから選んだ者たち」を構成する者として、この世界の通常のありように奇蹟を通じて働きかけることができる者として描かれている。一つ前の奇蹟譚におけるマルアシー・ナジャフイーが、その血統上の繋がりのおかげで無謬者から助けを受け、真に無謬者たちに準じるといえるような境地に向けて歩みを進めるサイドの姿を示しているとするならば、この奇蹟譚におけるホメイニーはすでにそのような境地に達したサイドの像を示していると言えよう³²。なお、筆者が (c) を伝えと考える奇蹟譚のなかで描かれる奇蹟には、大量に撃ちかけられた鉄砲の弾が一発も当たらなかったというような (62 [KS, 94])、主人公本人が意識的に起こしたものとしては描かれていないものも含まれる。

(a) から (c) の三つのメッセージは、神によって信徒の義務とされた愛

³² ホメイニーに関わる奇蹟譚は KS, 109-117 にかけて 9 話収録されており、彼を『サイドの奇蹟』のなかでも特に目立った存在としている。

情の受け手というサイイド像と無謬者たちに準じる導き手・権能者というサイイド像の二つをまたぎながら、サイイドが享受する神与の特別な立場を伝えている。このうち、(b)のうちでも無謬者からの導きに言及する奇蹟譚と(c)を強調する奇蹟譚はほとんどがアーリムとしてそれぞれの時代・環境において著名であった人々に関わるものであるが、この本の文脈ではあくまで「サイイドの奇蹟」として呈示されている³³。このことは、ある著名な人物にまつわる奇蹟譚の末尾に記される「[こうして] サイイドたちの美質と奇蹟の書に金色の紙葉がまた1頁加えられた」という言葉などから理解されよう³⁴。明示的にそう述べられるわけではないが、無謬者の導きを受けたり、意識的にと無意識的にとを問わず奇蹟を発現させたりすることも、サイイドであれば程度の差こそあれそれに与る潜在性を持つ資質として示されているのである。

なお、バーゲリヤーンがメッセージ(c)を重視していることは、『サイイドの奇蹟』という題名、収録される奇蹟譚の半数以上が(c)を伝えると読めることのみならず、彼がどのように奇蹟譚を集めているかについての観察からも理解される。実は、筆者が(a)のみ、あるいは(a)と(b)をとともに伝えると判断した計26話のうち22話が、ミール・ムハンマド＝アシュラフ著『サイイドの美質』(上記の通り、全引用話数24)から引用されているのである。バーゲリヤーンが『サイイドの美質』以外の材料から小口で集めた奇蹟譚の多くは(c)を伝えるものであったことになる。

おわりに

以上、『サイイドの奇蹟』が信徒集団のなかでのサイイドの立場と役割を

³³ 個々のウラマーの評判や声望の形成という文脈において彼らの奇蹟譚が持つ意味合いについては黒田賢治の議論がある(『イランにおける宗教と国家:現代シーア派の実相』ナカニシヤ出版、2015、66-86[第3章 聖者としての法学権威:現世利益と奇蹟];同章の基礎となった論文はイラン研究7[2011]:179-201で刊行された)。

³⁴ KS, 118. ほかにもイスファハーンのあるアーヤトollahにまつわる奇蹟譚(90)に見える「サイイドたちの一人の奇蹟」という文言を見よ(KS, 120)。匿名ないし無名のサイイドにまつわる奇蹟譚もわずかながら含まれている(94 [KS, 123-124], 96 [KS, 125], 104 [KS, 134-135])。なお、94と96の二つの奇蹟譚の主人公はベニンとマリのサイイドであり十二イマーム派信徒であったとは考えにくい、そのことは特に意識されていないようである。

どのように描いているのかを読み解いてきた。本稿での検討が、十二イマーム派のサイド観とイラン・イスラーム共和国体制にとってのサイドの意味に関しどのような知見を与えるものであったかを整理して稿を閉じよう。

十二イマーム派のサイド観を考えるに当たっては、サイドが、無謬者たちに連なる形で信徒集団を指導する権限と責務を分かち持つものとされていることが重要であろう。十二イマーム派は、ファーティマ裔のなかでも11名の特定の人物を特別視し、イマームという超人的な存在と認める。この特徴を踏まえるならば、十二イマーム派のサイド観を考えるにあたり、イマームおよび無謬者との関係という問題は重要な着目点となる。『サイドの奇蹟』は、その問題の答えが奈辺にあるかを示してくれたと言える。なお、神が信徒の義務とした愛情の対象というサイド理解のもう一つの柱は、スンナ派のサイド論にも歴史的に同じ形で見られるものである³⁵。

『サイドの奇蹟』は、イスラーム共和国体制にとってサイドがどのような意味を持ちうるのかという問いにも一定の見通しを与えてくれた。サイドに敬意を表し彼らに愛情を示すことが神の命令であるならば、常識的にいって、そのような対象をないがしろにすることはイスラーム共和国には許されないであろう。また、イスラーム共和国体制が、十二イマーム派を奉じ、その教えをイマーム不在の地上で実践しようとする体制であるならば、『サイドの奇蹟』で示される論理に従うかぎり、無謬者たちの代理であり、彼らに連続する存在であるサイドの力と指導に与らないという選択はないということになろう。

『サイドの奇蹟』でのサイド観が十二イマーム派ウラマーの（おそらくは多様な）考え方をどの程度代表するかは現時点では不明である。また、イスラーム共和国体制が十二イマーム派の伝統的なあり方にいくつもの改変をもたらしてきた革命的な体制であることも周知の通りである。したがって、ウラマーをイマームの代理とする理論にもとづくイスラーム共和国体制の、サイドをイマームの代理とする、この本で示されるような議論に対する態度はいかなるものであるのかという問いは、独立した別の問題として残る。しかしながら、筆者には、バーゲリヤーンのサイド理解には、イス

³⁵ C. van Arendonk [W. A. Graham], "Sharif," in *The Encyclopaedia of Islam, New Edition*, H. A. R. Gibb et al. (eds.), 13 vols., Leiden: Brill, 1960–2009, 9: 335–336 [329–337].

ラーム共和国体制にとってのサイドの意味を考えるのに特に有用なところがあるように思われる。

それは、『サイドの奇蹟』に見て取ることができるバーゲリヤーンのウラマー観に、イスラーム共和国というアイディアを可能とし支えているとされるある種の指導者観・ウラマー観と通じるところが見受けられることによる。バーゲリヤーンが奇蹟譚の収集にあたってウラマーの伝記に多く取材していることは前述の通りであるが、そうして集められた奇蹟譚から浮かび上がってくる有徳なウラマーの像とは、単に伝承知や理性知に優れているだけでなく、同時に直観知を持ち不可視界にも通じたアーリフ（‘arīf；神秘家）であるような人々、アーリフの道であるイルファーンにおいて高い境地に達した人々である³⁶。また、奇蹟譚のなかには、歴史的に一つの政治勢力をなしてきた集団として十二イマーム派のウラマーを捉えるバーゲリヤーンの理解を窺わせるものもある³⁷。イスラーム共和国体制を支える「法学者の統治」理論に、ホメイニーらのイルファーンへの強い関心を背景として、高い境地に達したウラマー兼アーリフによる哲人王的な統治という発想が組み込まれていることはつとに指摘されてきた³⁸。ウラマー兼アーリフの常人離れをした力を描く『サイドの奇蹟』からは、バーゲリヤーンが、「法学者の統治」という、イスラーム共和国体制を支える根本理論と相通じるような形で、ウラマーおよびその権威・権力を捉えていることが窺われるのである。そして彼がホメイニーこそをそうしたウラマー兼アーリフの代表格と捉えていることはここまでの議論からすでに明らかであろう。とするならば、『サイド

³⁶ そもそも、そのような人々であるがゆえに奇蹟を起こすことができるということになるわけであろうが、たとえば、モハンマド＝ホセイン・タバターバーイー（1981年没）を主人公とする奇蹟譚の一つの次のような書き出しを見よ（KS, 76）：「大学者、セイイエド、モハンマド＝ホセイン・タバターバーイーは間違いなく近数世紀のうちに現れた希有な人物の一人であった。現代の卓越した哲学者で模範的なクルアーン注釈者であったかのお方は、究極の純粹神秘知（owğ-e ma‘refat va ‘erfān-e nāb）と霊的な完全性を帯びておられた。かの偉大なお方に起こった奇蹟と開示（karāmāt va mokāšefāt-e ān bozorgvār）はかの敬虔なるアーリフ（‘āref-e rabbānī）の崇高なる神秘知を示すものである」。

³⁷ KS, 87-88. 19世紀前半を舞台にしたシャフティー（Muhammad-Bāqir Šaftī；1844年没）とファトゥフ・アリー・シャーの対立にまつわる奇蹟譚。

³⁸ たとえば、Hamid Dabashi, *Theology of Discontent: The Ideological Foundation of the Islamic Revolution in Iran*, 1993, London and New York: Routledge, 2017, esp. 287-290, 413, 463-465; Vanessa Martin, *Creating an Islamic State: Khomeini and the Making of a New Iran*, 2000, new ed., London and New York: I.B. Tauris, 2003, 29-47.

の奇蹟』は、法学者をイマームの代理とする理論にサイドをイマームの代理とする議論がどのように組み合わせられうるかを示唆する興味深い書物と言えるのではなからうか。

「はじめに」で述べたように、本稿での『サイドの奇蹟』の検討は、十二イマーム派のサイド観とイスラーム共和国体制にとってのサイドの意味を考える上での最初の一步をなすに過ぎない。今後は、ほかのサイド論のなかでのサイドの論じられ方だけでなく、ことさらにサイドの特別性が論じられているわけではない文脈におけるサイドの現れ方も検討されていく必要がある。たとえば、モハンマド＝ホセイン・タバータバーイーは、その十二イマーム派概説でイマームを論じる文脈において、『「お家の人々」や「一族」という言葉が指すのは、預言者の一族や子孫の全てではなく、ある決まった人々であることが明らか』と述べている³⁹。教義体系全体を考えると、両方の言葉をサイド全般を指すものと理解するバーゲリヤーンの立場とこの言明が示すタバータバーイーの立場はどのような関係のもとに理解されるべきであろうか。

また別の課題として、十二イマーム派やイスラーム共和国体制にとってのサイドの意味を考える上で重要な論点であることが明らかであるにもかかわらず、『サイドの奇蹟』に言及が見られなかったり同書中での扱いが軽いものであったりするために本稿では取り上げることができなかった諸問題の検討がある。たとえば、イスラーム共和国体制がサイドに期待する役割に、シーア派・スンナ派融和のための橋渡しというものがあるのは明らかであろう⁴⁰。こう述べてくると今後の課題の膨大さとなしえたことの僅かさを思い知らされるが、本稿での議論についてはここで閉じることにしたい。

³⁹ モハンマド＝ホセイン・タバータバーイー『シーア派の自画像：歴史・思想・教義』森本一夫（訳）、慶應義塾大学出版会、2007、176。

⁴⁰ このことは、たとえば、イスラーム諸宗派接近世界協会（Majma'-e Ġāhānī-ye Taqrīb-e Mazāheb-e Eslāmī）の主催で2018年と2019年の2度開催された「サイド大集会」（Hamāyeš-e Bozorg-e Sādāt）に見て取ることができる（<https://www.mehrnews.com/news/4243935/> بزرگسادات برگزار می شود ; <https://www.ettelaat.com/archives/426931#gsc.tab=0> 2022年11月17日閲覧）。